

インド・アッサム州ボドランドの森林地における エスニック紛争と国内避難民

木 村 真希子

1. はじめに

1993年10月7日、インドのアッサム州コクラジャル県とボンガイガオン県（1993年当時、現シラン県¹）の森林地帯において、ベンガル地域に出自を持つムスリム農民の村が覆面をした武装集団に襲撃される事件が起きた。約20名が殺害され、3万人が生命の危険を感じて国内外に避難した。同様の事件は断続的に継続し、1994年にはバルペタ県にも飛び火し、約100人が死亡、7万人が国内避難民となった（Chaudhuri 1994: 29）。

アッサム州西部におけるエスニック間の紛争はこのあとも継続した。1990年代にいくつかの暴動が起き、多い時には50万人の避難民が発生した。特に1996年と1998年には、先住民族²のボドと他州から移住してきたアディヴァシの間で暴動が起き、コクラジャル県を中心に多くの人々が避難し、避難生活も長期化した。紛争の被害者の数は100から200人程度であるが、暴力を恐れた人々が数万人単位で逃げ出して避難民となるのがこの地域の紛争の特徴である。また、多くの暴力が森林地帯で発生したり、拡大する際に森林地帯を中心に広がることも特徴的である。そのため、政府とボド民族組織の間で2003年に第二次ボド

協定が締結された後も、紛争の被害にあった人々の多くは村に帰ることができず、不安定な状況に置かれた。また、2012年と2014年には新たな暴動が発生し、1990年代に避難民となった人々の多くが再度被害にあった。

この地域における暴力は、1980年代後半にはじまったボドランド州要求運動と切り離して考えることはできない。ボドの人々の自治を達成するために全ボド学生連合（All Bodo Students' Union, 略称 ABSU）が始めた運動は、ボドの学生や大衆の支持を得て部分的な自治を達成し、1993年にはボド自治評議会の設置に合意した第一次ボド協定が締結された。しかし、インド連邦政府やアッサム州政府との交渉過程でどの領域をボド自治評議会の管轄領域とするのかについて紛糾したことをきっかけに、ボドランドとして要求された土地の一部でムスリム移民が排斥される事件が起きた。これが1993年10月のことである。続いて1996年と1998年の暴動ではアディヴァシの人々がターゲットとなり、その後10年以上に渡って国内避難民キャンプでの生活を余儀なくされた。その後は政府から5万ルピーの一時金が出た後にキャンプが閉鎖されたが、多くの人々は村に帰還することができず、散り散りになっていった。

¹ 後述のように、2003年の第二次ボド協定の結果、ボンガイガオン県の北側はシラン県として新たな県が設立された。本稿では1990年代当時と現在の県名が違っている場合には、その旨表記する。

² アッサム州にもっとも古くから居住しているのは、ボドやラバ、ティワなど山岳地に起源を有する少数民族である。イギリスの植民地化以降、官僚や文化人類学者は、ヒンドゥー教やイスラム教の影響を受けていないこれらの民族を「未開」とみなして「トライブ (tribe)」と名付けた。インド独立以降は行政上「指定トライブ」という区分が設けられている。近年の国際的な先住民族の権利回復運動の中で、北東部の一部の少数民族も自らを先住民族と定義し、「トライブ」という呼称を差別的であるとして忌避する傾向も見られる。本稿の主な対象であるボド民族の組織は「トライブ」を使用する場合が多く、また法行政上の用語としてトライブが利用されることも多いため、本稿では「先住民族」と「トライブ」を併用する。

本稿では、2010年から2016年にかけて行った現地調査を基に、この地域における紛争と国内避難とは何を意味するのかということを紛争の被害にあった人々の視点を中心としながら分析する。ボドランド運動と武装勢力による活動は2003年のインド連邦政府とボドの武装勢力との間の合意によって政治的な解決に至り、北東部における数少ない平和構築の成功例と呼ばれることもあった。しかし、1990年代の紛争の被害者はその後10年近く経過しても元の村に帰還することはできず、行政による再定住の支援もほとんど受けることはできなかった。また、武器を捨てて投降したはずの旧武装勢力による暴力も頻発し、地域の人々は身の安全を確保できないままである。実際、2012年と2014年にはムスリムやアディヴァシに対する攻撃が再発した。このように、政府の「紛争は解決した」という姿勢と、現場で人々の経験する現実とは非常に乖離している。本稿では、コクラジャール県、シラン県、ボンガイガオン県の国内避難民キャンプ、支援NGO、行政官へのインタビューと二次資料を基に、なぜ避難生活が長期化するのか、そしてなぜ森林地帯がターゲットとなるのかについて分析し、人々の視点を通じて見えてくる紛争とは何かを考察したい。

2. 「ボドランド」をめぐる歴史と紛争の背景

2-1. 「ボドランド」をめぐる歴史

「ボドランド」とは、2003年にボドの武装組織であるボド解放の虎（Bodo Liberation Tiger, 略称BLT）とインド連邦政府、そしてアッサム州政府との間で第二次ボド協定が締結されたあと、2005年に設置された4つのボドランド領域自治県（コクラジャール、シラン、バクサ、ウダルグリ県）を指す。ただし、1980年代後半にABSUがはじめて「ボドランド要求」を掲げた際にボドランドとして要求した地域はより広く、現在の紛争の被害にあったソニットプル県、さらに東北のラキンプル県、デマジ県まで含まれる。そのため、現在のボド領域自治県よりも広い、当初の要求地域が「ボドランド」と呼ばれることもある。

ABSUがボドランドとして要求した地域は、平野部に住むトライブの人々の土地を守るために設置された後進諸階級保護地帯／地区（Backward Classes Belts and Blocks）で指定された地域がもととなっている。植民地時代、移民の流入や近代的な土地の私的所有制度の導入により、先住民族の人々の多くはそれまで利用していた土地へのアクセスが難しくなり、森林地帯やより人口の少ない地域へ移動していった。1930年代にはこうした先住民族の人々の間の土地問題が議会で問題視され、アッサム州議会は1947年にアッサム地租規則において後進諸階級保護地帯／地区³を設置した。これは通称トライブ保護地帯／地区と呼ばれ、指定された地域ではトライブ等の後進諸階級の人々以外への土地の譲渡が禁じられた。しかし、この規則は遵守されず、実際には広大な土地が移民やアッサム人の手に渡ったり、開発によってトライブ以外の人々の手に渡っていった（Das 1986: 35-38; 木村 2012: 97-98）。

1960年代には、トライブ保護地帯／地区で自治を達成するため、ウダヤーチャル（Udayachal）という名称の連邦直轄領を設置する要求が活性化した。1960年代にはアッサム州の公用語をアッサム語とする運動に触発され、アッサム語を母語としない丘陵部の先住民族の間で自治を求める要求が高まっていた。1967年にガロ丘陵とカシ・ジャインティア丘陵（現在のメガラヤ州）の分離と州再編が決定されたことをきっかけに、平野部における先住民族の人々がまとまって自治要求をするアッサム平野トライブ評議会（Plains Tribal Council of Assam: PTCA）が結成された。PTCAはトライブ保護地帯／地区で指定された地域を中心に、ブラフマプトラ川北岸のブータンとの国境とアルナーチャル・プラデシュ州との州境に広がる広大な地域をウダヤーチャル領域として要求した。

ABSUがボドランドとして要求した地域はウダヤーチャルとして要求された地域とほぼ重なり、ABSUの要求もトライブ保護地帯・地区をもとにしているといえるだろう。PTCAはボドだけでなく、ラバ、ミシン、デオリ、ラルン等の平野

³ 後進諸階級には、平野部と丘陵部のトライブのほか、茶園トライブ、サンタル人、ネパール人、指定カーストとネパール人まで含まれていた（vide Assam Government's notification no. R.D.69/46/19 dated the 5th of December 1947）（Narzary 2011:51）。ただし、法適用後も通称は「トライブ保護地帯・地区」と呼ばれているため、本稿でもこの通称を利用する。

部のトライブをすべて含めた運動だった (Narzary 2011: 44)。これに対し、ABSU がボドランド要求を開始した際、ABSU はボドを 2 つの意味で使い分けた。広義のボドは、ラバやメッチ、ディマル、コッチ、ディマサ、ホジャイ、ラルン、ガロ等平野部のトライブのほとんど全てを含めた概念とされ、一方でボド語を話す狭義のボドは「ボド・カチャリ」と呼んで区別された (ABSU 2001: 19)。ただし、ABSU の中心人物のほとんどは狭義のボド民族の出身であり、ABSU も狭義のボドの団体として理解されている。ボドと居住地域の重なるラバが全ラバ学生連合を持ち、異なる自治評議会を要求したことを見ても、実態として ABSU は狭義のボドの団体と言って良いだろう。

トライブ保護地帯・地区は人口の 50% 以上がトライブや後進諸階級で構成される村を特定して作成された。ただし、トライブや後進諸階級が多数の村は必ずしも固まっていたわけではなく、地理的な一体性を持たせるため、トライブの人々が多数ではない村も一部の地帯や地区に編入された。さらにその後、実際にはトライブ保護地帯・地区への指定者以外の流入が続いたこともあり、1980 年代当時には既にボドランドとして要求された地域の多くがボドもしくはトライブ多数の地域ではなかった。そのため、のちにボド自治評議会が設置される際に管轄領域の設置をめぐるボドの人々の間の不満が表出し、紛争が起きるきっかけを作ることとなった。

2-2. ボドランドにおける集合的暴力の特徴と紛争の構造

①暴力の種類：武装勢力の存在と集合的暴力

ボドランド州要求運動以降、この地域においてはいくつかのタイプの暴力が発生している。まずは、武装勢力による暴力である。ABSU による運動と前後して、ボド防衛隊 (Bodo Security Force, BdSF) が結成され、ボドランド独立を目指して武装活動を展開している。ボドランド州というインドの中での自治州を目指す ABSU とは異なり、BdSF はインドからの独立を目指しており、ナガの武装勢力の協力を得て訓練や武器の供与を受け、インド政府に対して作戦を展開した。ボド防衛隊 (Bodo Security Force, BdSF) は 1994 年にボドランド民族民主戦線 (National Democratic Front of Bodoland, NDFB) と改称して武装活動を継続

し、2005 年にはインド政府と停戦協定を締結するが、一部が分派して武装活動を継続し、現在に至っている。

また、1990 年代半ば、第二次ボドランド運動の最中にはボド解放の虎 (Bodo Liberation Tiger, BLT) が結成された。BLT の前身は ABSU の武装組織であるボド奉仕隊 (Bodo Volunteer Force) であり、ABSU と同じくボドランド州要求を掲げて武装活動を行った。なお、BdSF / NDFB と BLT はライバル関係にあり、それぞれインド政府の治安維持部隊に対する作戦を行うと同時に、両者の間で紛争があったということが指摘されている。

こうした武装組織による暴力に対し、冒頭で例に挙げたような暴力は一般の民衆が参加する集合的暴力、いわゆる暴動である。本稿では集合的暴力を、「(あるエスニック集団に属する) 市民による (別のエスニック集団の) 市民に対する突発的で集中的な、殺害を目的とした行為」と定義する (Horowitz 2001: 1)。本稿では武装勢力による暴力よりも、一般の民衆が参加するタイプの暴力を主に対象とする。ただし、1990 年代の大規模暴動のきっかけは武装勢力が引き起こしたものの、その後一般の村人が参加するというケースが多く、そのため前者と後者を明確に分離することは難しい。

②エスニシティと暴力

集合的暴力はしばしば、宗教や言語、文化の異なるエスニックな集団に対して向けられる。ボドランドにおける紛争でも、ベンガル地域に出自を持つムスリムや、他州からの移民であるアディヴァシが主な標的となっている。両者に共通するのは、この地域がイギリスに植民地化されて以降、他州から移住してきた集団であるということだ。アッサム州において、「移住者」か「土地の者」という線引きは植民地時代以前からの住民かそうでないかが目安となる (Baruah 1999: xvii-xviii, 18)。

ベンガル地域に出自を持つムスリムは植民地時代にイギリスが政策的に入植させた集団であり、アッサム州の現在の人口の約 30% を占める。移民集団の中では最も大きな集団であり、ボドランド運動以前にも 1979 年にはじまるアッサム州全体に影響を及ぼした反外国人運動において排斥のターゲットとなった (Kimura 2013a)。ムスリム

移民のほとんどは開拓農民として入植し、結果的にトライブの土地を奪うことになった。2-1 項で説明したトライブ保護地帯／地区設置の要因となった移民のほとんどはベンガル地域に出自を持つムスリム農民である。

一方、アッサム州においてアディヴァシと総称されるサンタル民族、オラオン民族、ムンダ民族はインド中央部から東部にかけての山岳地帯の先住民族である。アディヴァシの多くは茶園の労働者としてアッサム州に移住してきたものが多い。ボドランド地域には茶園は多くないが、植民地化とサンタル反乱以降、困窮していたサンタル民族の人々を開拓農民としてアッサム州に移住させるためのサンタル・コロニーが北欧系の宣教師によって現在のコクラジャル県に設立された。そのためもあってか、現在のコクラジャル県とシラン県におけるアディヴァシ人口は地域によって 20 から 30% を占める。サンタル・コロニーや茶園の労働者として移住した多くの人々がその後、農地を得て外に定住しており、1990 年代の暴動ではムスリム農民について標的となった。

攻撃では最初にムスリムやサンタルが襲撃を受けるが、その後報復としてボドの住民に対して攻撃が起きることもあり、脅威を感じて逃げる人はボド側にも少なくない。ただし、死者の数はムスリム、アディヴァシ側の方が圧倒的に多く、避難生活の長期化する傾向もムスリムとアディヴァシに顕著である。こうした状況から、ボドランドにおける暴力を「民族虐殺 (ethnocide)」や「民族浄化 (ethnic cleansing)」と呼ぶジャーナリストや研究者も多い。

ただし、先述のように攻撃は一部の武装勢力によって始められるものの、その後一般の人々の間に広まっていく際には地域ごとに攻撃が決定されていく場合も多く、攻撃に参加する人々の動機も様々である。また、全てのボドの人々が攻撃に参加しているわけではなく、しばしば全てのボドが暴力に参加しているような印象を与える「民族浄化」という言葉を使うことは誤解を招きやすく、注意が必要でもある。

3. 集会的暴力と避難生活のはじまり：1993-94 年暴動

1993 年 10 月初頭、コクラジャル県とボンガイガオン県（当時、現シラン県）においてムスリム

がターゲットとなる暴力事件が発生した。覆面をした武装集団がボンガイガオン県とコクラジャル県の境界の森林地帯の村を攻撃し、約 20 名が死亡、2 万人が身の危険を感じて村を逃げ出し、国内避難民となった。

事件の背景にあるのは、この年の 2 月にアッサム州政府と全ボド学生連合の間で締結された第一次ボド協定と、協定の重要な成果であるボドランド自治評議会 (BAC) の管轄領域に関する対立である。BAC は 3 月 7 日に設立され、5 月には BAC の暫定評議会が結成されたが、直後に BAC の管轄領域をめぐるボドの指導者とアッサム州政府との間で対立が起きる。州政府はボド人口が 51% 以上の村のみを管轄領域に含めると決定したことに対し、ボドの指導者層が反発した。さらに 515 の村を含め、一定の領域が BAC の管轄下に来よう要求したボドの指導者たちに対し、州政府は一部のみ妥協した 2,570 の村が BAC の管轄下になると発表した。これに対して暫定評議会の代表が抗議の意を表して辞任し、BAC は設立直後に機能不全状態に陥った。攻撃にあったムスリムの人々は、その直前から「立ち退き命令」がボドの武装組織によって出されており、身の危険を感じる状況にあったという。以下、避難キャンプの人々の証言を中心に、攻撃時の状況と再定住の様子を再構成する。

3-1. 1993 年 10 月の襲撃：森林地での暴力

2010 年から 2011 年の現地調査の時点では、1993 年の攻撃にあった人々はボンガイガオン県のいくつかの場所に避難民キャンプに集住しており、当時の様子やその後なぜ村に戻れないのかということについて話を聞くことができた。キャンプのひとつ、サラビラ・キャンプの指導者であるムハンマド（仮名）は以下のように語った。

1993 年 10 月 7 日、ボドの過激派による攻撃が起きた。ミロン・バザール付近がまず攻撃されたが、その後ナラヤンプルからアムグリまで 40 ほどの村が影響を受けた。5,400 家族、27,000 人に被害が及んだ。

1993 年は会議派政権だった。州首相サイキアがやってきた。鎮圧のために 107 人が負傷・死亡した。われわれは、ブータンとの国境まで行き、ブータン側に一時落ち着いた。しかし、10 月 9 日に政府がやってきて、避難

キャンプに入ることができた。ボンガイガオンの学校やカレッジに一時避難した。15日後、ミロン・バザールから北に50kmほど、ボンガイガオンの町の北側に収容された⁴。

ボンガイガオンには調査の時点で4つの避難キャンプが存在したが、もうひとつのハパサラ・キャンプでも同様の証言が得られた。

1993年、ボドの集団が攻撃してきた。当時はパウラグリという、ボンガイガオンの町から50kmほど北に行ったところの村に住んでいた。全部で50ほどの村が焼き討ちにあり、6,500家族が被害に遭った。

その日は朝の4時、早朝で眠っていたところを、50人ほどの顔をマスクで隠した武装集団がやってきた。家に火をかけ、発砲し始めたのでみんな逃げた。攻撃は3日ほど続いた。初めはみんなで、棒などで立ち向かおうとしたが、一人が撃たれてなくなり、みんな怖くなって逃げた。ブータン側のゲレフーまで行った。他に、ベンクトルやアムグリ村まで逃げたものもいた⁵。

このキャンプでは、さらに詳しく再定住の様子を聞くことができた。

翌日、ルニカタの警察がやってきて、ボンガイガオンのカレッジに避難した。その後、大臣なども訪問し、(状態が沈静化したということで)元の村に帰ることになった。われわれはあまり帰りたくなかったが、ほとんど強制的に連れ戻されることになった。4つから5つの村が集まって、一緒に暮らしていた。当時は中央武装警察隊(CRPF)が配置され、食料配給もあった。しかし2000年冬にCRPFがいなくなると、また安全が脅かされた。ビジニ(15km離れた町)に行ったが、土地がないのでここに来た。ここは、20ビガほどの土地を1万ルピー支払って借りている。一家族100ルピー分担し、ムスリムの土地所有者から借りている⁶。

1993年の襲撃でターゲットとなったのは、ボンガイガオン県の県庁所在地から北に25km行ったシラン留保林(Reserved Forest)という国有林の中である。この地域は北はブータンとの国境、東と西はそれぞれカナマクラ川とアイ川に挟まれた三角州となっており、北半分はシラン留保林、南半分は行政村(revenue village)となっている。森林地帯にはいくつかの森林村(forest village)が存在していたが、さらに1970年代に河岸浸食によって土地をなくした人々が再定住した。攻撃は主に森林地帯で起きたが、周囲の行政村に住むムスリムもターゲットとなった。

ボンガイガオン県のキャンプにいる人々は、ほとんどが攻撃当時はシラン留保林内に住んでいた人々である。事件のあと、人々は一度村に帰ったが、2000年代に入ると再び暴力に脅かされるようになり、村を出て、多くの場合は自分たちで再定住先を探して一時避難をしていた。

3-2. 再定住の要請と政府への抗議行動

村人たちは共同で土地を借り、キャンプで暮らしているが、住む場所は確保できても耕作のための農地はない。日雇い労働で稼がざるを得ないが、毎日仕事を得られるとは限らず、生活は非常に苦しい。そのため、キャンプ内では日常的に食料が不足しており、栄養不足から病気になり、また餓死するものも出たという。生活が立ちいかないため、人々は政府に対して再定住地や家の建設費を要請する行動を起こしていた。

サラビラ・キャンプのムハンマドはこうした要請行動の中心をになっており、事態の経緯について詳細に語った。

インド国民会議派のサイキア政権時代の1995年までは食糧配給やその他の配給なども問題なかった。しかし1996年に会議派からアソム人民党(AGP)政権になると、食糧配給が少なくなった。また、ボドの武装集団もやってきたため、安全も心配された。そこでムスリム出身の大臣に陳情に行き、われわれはこれでは生き延びられない、と訴えた。大臣は一家族1万ルピーの給付金と、どこで

⁴ ボンガイガオン県サラビラ難民キャンプの指導者とのインタビュー(2010年8月27日)。

⁵ ボンガイガオン県ハパサラ難民キャンプにおける集団インタビュー(2011年3月5日)。

⁶ 同上。

も行って再定住できるようにすると約束したが、実際には給付金は935世帯にわたっただけだった。4,000世帯は何も受け取れなかった。

そこでわれわれは抗議をはじめた。2001年、会議派のタルン・ゴゴイが政権を取ると半エーカーの土地を約束した。しかし、実行されなかったのも、デリーまで行ってアジェーションやハンストを行ったが、半エーカーの土地の約束は実現されなかった。われわれはボンガイガオン県でデモを実施したが実現されず、結局家の建設は諦めた。ゴゴイ首相は土地を買うための資金として5万ルピーを約束したが、みんな最低10万ルピーはほしいと主張した。また、家の建設も約束された。一部はすでに支給されている⁷。

こうした行動はサラビラ・キャンプやハパサラ・キャンプの単独の動きではなく、他のキャンプも協力して一緒にデモや要請行動を行っている。避難民となっているムスリムの人々の第一の要求は生計を維持するために耕作できる代替地の提供であったが、既に人口過剰なこの地域では代替地の提供は容易ではない。そのため、政府は5万ルピーの見舞い金を提案しているが、人々はせめて10万ルピーが必要であると主張している。5万ルピーでは家を購入するための土地しか買えず、耕作地まで含めると倍の金額が必要だという。

では、なぜこのように帰還が困難なのだろうか。2000年前後に発行されたコクラジャル県県長官の報告書では、行政村や森林村への再定住は進んでいるが、森林地に不法定住している住民の帰還が進まないということが理由として挙げられている(The Deputy Commissioner, Kokarjhar 2000: 4)。しかし、実際には先述のように住民たちは「危険があるので帰還できない」という理由を上げている。また、行政村出身者のなかにも、未だに村に帰れない者たちがいる。この食い違いはどこから出てくるのだろうか。次節では、行政村出身の避難者たちの証言を検討してみたい。

3-3. 継続する暴力

攻撃当時はコクラジャル県西端、現在はシラン県に位置するベングトル村には、近くの村から来た45家族が避難している。このキャンプに避難している人々は、現在のキャンプから北に8kmほどいったところにあるバラジャル村とサルバリ村の出身者である。以下、村の代表者の話を聞いた。

ここに来たのは18年前。われわれは1993年の攻撃でやってきた。1993年、ボドの人々からの攻撃の前、攻撃があるということを知らされたので逃げた。ベルトラの学校に避難した。全部で43家族がいた⁸。

バラジャル村とサルバリ村は行政村で、永年地権も持っていたという。しかし、1998年に食糧配給が止まり、食べるものがなくなったので、所有していた土地を売ってしまった。今は1ビガ15,000-20,000ルピーで買えるが、当時は5ビガを15,000ルピーほどで売ってしまった。

2003年にはもう一度、4人が首から切り落とされるという事件が起きた。こうしたことがおきているので、村には戻れない。この地域はみな、ボドに占領されたようなものだ。政府も、一体どれだけ長く安全を保障できることか⁹。

バラジャル村もサルバリ村も、ボドとムスリムの混住する村だった。バラジャル村には20、サルバリ村には23のムスリムの家族が住んでいた。攻撃の際には、武装勢力と一緒に村人も略奪に参加したという。しかし、村長の証言によればこの地域のムスリムは18世紀からこの地域に住んでおり、ボドの村人との関係は悪くなかったという。

1993年の攻撃の1年前、村で集会があつて呼ばれた。ボドの長老たちがいて、こう言った。54,000エーカーの土地がよそものに奪われている。しかし、あなたたちはここに長くいるから攻撃されることはない、というこ

⁷ ボンガイガオン県サラビラ難民キャンプの指導者とのインタビュー（2010年8月27日）。

⁸ コクラジャル県ベングトル難民キャンプにおける村長とのインタビュー（2011年3月6日）。

⁹ 同上。

とだった。でも攻撃された¹⁰。

「よそものに奪われている」とはどういうことかを尋ねると、次のような答えが帰ってきた。

ジャムラグリ、アムテカ、コイラモイラなど（シラン保留林内の村）のこと。この地域は、1970-72年、会議派政権がムスリムを再定住させた。彼らはバルペタ県、ボンガイガオン県、ゴアルパラ県などから来た人たちだ。河岸浸食のため、再定住させられた¹¹。

3-1. で見たように、攻撃の中心地となったのはシラン保留林の中の森林地帯である。上述の村は森林村として地図にも名前が掲載されているが、その周囲は不法定住した人々の村に取り囲まれている。ベンクトル・キャンプの村長は、この地域への再定住は勝手にムスリムがやってきて住み着いたわけではなく、1970年代初頭に会議派政権が人々を再定住させたと証言している。続いて、自分たちの境遇について下記のように語った。

ここはパンチャーヤット外なので、さまざまなスキームから外れている。年金や配給もない。BPL（貧困線以下の困窮者）カードは13家族が持っている。しかし、政府は6カ月だけ配給して、そのあと持って行ってしまった。また、NGOが6家族に食糧を配給したが、定期的ではない。ハパサラ・キャンプのアジテーションに自分たちも加わっている¹²。

ベンクトル・キャンプでの証言から読み取れることは、土地の権利の問題よりもむしろ、暴力によって自分たちの村に戻ることができない状況である。さらに、行政からの支援が停止したことによって土地を売却せざるを得なくなり、法律上も土地の権利を失ってキャンプでの生活の長期化を余儀なくされた。しかし、第2節で紹介したムスリムのキャンプと同様に、耕作地がないためにキャンプでの生活は苦しく、行政村で受けられるような行政からのサポートも受けにくい。

もうひとつ、行政村から避難してきた人々のキャンプの事例を挙げよう。ナガルバンガ・キャンプの人々はシシュバリ、カグラバリ、パニガオン、ベシヨルバリなど、シラン保留林の南側の行政村から避難してきた人々である。自分たちの村から数kmほど南のナガルバンガ村で土地を借り、110世帯、616人が生活している。元の村では地権を持っていたが、1993年からキャンプでの避難暮らしをしているという。

このキャンプの人々は、2011年のインタビュー当時、既に5万ルピーの見舞金を受け取ったという。しかし、結局行くところがないのでキャンプにとどまっている。このことから、5万ルピーでは代替地の確保に十分ではないということが確認できる。以下、キャンプでのグループ・インタビューでの証言を紹介する。

1993年の攻撃は、武装勢力がやったもの。黒いマスクをしていたので、近隣の村の人が加わっていたかどうかはわからない。この村から4人が殺された。最初はアムグリ村に1週間ほど避難した。ここでの主な生業は日雇い労働か漁業だ。

自分はオウグリ村出身だが、怖くてマーケットに行くこともままならない。ボドの人たちに牛耳られている。そのため、働くのも大変だ。警察もあの地域に行くのは怖がっている。一月前に、碎石していたムスリムが行方不明になった。コイラモイラのハグラ・パザールでのことだ。1年ほど前には、バナナを取引していた者が行方不明になった。1999年の1月26日には、3人が日中に射殺されるという事件が起きた。また、シシュバリ村の近くのシムラグリでは、ムスリムが路上でボドの武装勢力に射殺された。この近くにあるのはアムグリ、コイラモイラ、ベンクトル、オウグリ、ビジニの5つだ。前者二つはなかなか行けない¹³。

ナガルバンガ・キャンプの人々は、さらに河岸浸食というもう一つの問題に直面している。村の

¹⁰ 同上。

¹¹ 同上。

¹² 同上。

¹³ シラン県ナガルバンガ難民キャンプにおける集団インタビュー（2011年3月8日）。

近くを流れる川の流れが変化したことによって浸食が起き、現在キャンプとして居住している場所もそのうち沈んでしまうのではないかと懸念を表明していた。実際、既に1-1.5kmほどの土地が沈んでおり、状況の深刻さを伺わせた。

行政村から避難してきた人々の証言により、村への帰還を困難にしているのは土地の権利の問題よりも、暴力や身の安全の問題の方が大きいということが確認できる。ベンクトル・キャンプでもナガルバンガ・キャンプでも、ムスリムが殺害される事件が起き、身の危険を感じたために避難したと証言している。

以上の証言から、シラン保留林のアムテカ地域の問題は単なる森林の不法占拠ではなく、政府による再定住の計画があった地域であることがわかる。当時の会議派政権は支持者の要求に応え、河岸浸食や人口増などで土地のない人々を保留林内に再定住させた。再定住の規模が大きく、多くの人が70年代初頭にまとめて広大な土地に再定住したことを考えると、おそらくは森林指定を解除して行政村に転換するつもりもあったのではないかと。しかし何らかの理由でそれは実現しなかった。1970年代後半には環境保護の機運が高まり、1980年の法改正で国有林の指定解除は州政府が単独で実施することが難しくなった。

一方、ボドの人々の目には、トライブ保護地帯・地区に隣接する留保林にベンガルに出自を持つムスリムを中心に人々が増えたことは、「バングラデシュ人」による不法占拠ではないかと映った。実際、PTCAの事務総長であったチャレン・ナルザリは回想録の中で、「アムテカ地域にバングラデシュからの不法侵入者がやってきて、土地のトライブの人口を超えてしまった。対策が必要である」という趣旨の覚書を中央政府に提出したと記している。提出年は記されていないが、インディラ・ガンディー時代ということで、人々が再定住させられた1970年代から既にこのことがボドの人々の間で問題視されていたことが明らかである(Narzary 2011: 114-5)。

以上のように、ベンガル地域に出自を持つムスリムの人々は、ボドランド運動開始以前から「バングラデシュ人」とみなされて、「トライブから土地を奪っている」と敵視されてきた。1980年代にアッサム州全体で移民排斥の機運が高まった反外国人運動の最中には暴力やいやがらせの対象となり、1983年の州議会選挙の際には約2,000人が

殺害されるネリーの虐殺等も起きた。これに対して、アディヴァシの人々は土地の人々との関係が良好であり、ボドランド運動以前はあまり敵視されることはなかった。1990年代のアディヴァシへの攻撃はどのようなものであったのか。次節で詳しく検証したい。

4. アディヴァシへの被害の拡大：1996年、1998年暴動と森林地

4-1. 暴力の経験

1996年のアッサム州議会選挙のさなか、3人のボドの少女が殺害され、サンタル居住地域で発見されるという事件が起きた。サンタルによる仕業と疑った人々がサンタルの村を攻撃し、報復としてボドの村も攻撃された。約20万人が避難し、数ヶ月から一年ほど避難生活を送った。1998年、人々が村に戻り始めた頃、再度襲撃が起き、1996年に避難した多くの人が再び国内避難民となった。二度目の襲撃があったため、人々の避難生活は長引き、第二次ボド協定が締結されるまで多くの人が避難生活を余儀なくされた。当時の経験について被害にあった30代前半の若い男性の証言を紹介する。

自分は96年の時点で17歳だった。ゴサイガオンで、サンタルがみんな殺されてしまった、というニュースを受けた。それで集まって、どこに逃げようかと話していた。警察も、どこでも逃げられるところに逃げなさい、と言った。5月15日に知らせを聞き、16日にジョイプルやマリガオンから、家を焼かれて逃げてきた人たちに会った。それで朝8時に集まって、警察署に逃げ込んだ。西側から、サンタルの村人が3人やってきた。自分たちの村が焼かれて、殺された、と言っていた。

そのあとキャンプが設立されたが、最初は食べ物がなかった。それに、マラリアや下痢など、病気も起きた。少しして月に10日間分だけ食糧が配給されるようになったが、十分ではなかった。最初は家族とも散り散りで、一週間してようやく家族と再会できた。そのうち地域別にキャンプが設立されて、自分たちの地域ではカリガオンにキャンプができた。キャンプでは病気が多発して、子ども

たちが大勢死んでいった。1996年12月、1万ルピーの補償金が出て、97年に家に戻った。そして98年にまた事件が起きた。

98年7月の事件は、アディヴァシ側も集まって備えた。今度は西のジョイプルやビシュムリに逃げた。50人の武装した兵士がやってきて、翌日には村を焼いてしまった。さらに3ヶ月後に、キャンプが襲われるという事件も起きた。夜中で、幸いみんな壁のそばで眠っていて、死人はでなかった。警察が応戦していた。これだけで、大きな、準備された襲撃だったということがわかるだろう。

2001年に停戦が結ばれて、状況がよくなった。さらに2003年に臨時評議会が設立されて、徐々に良くなってきた。警察や軍が和平会合を開いたりもした。そして2005年に沈静化したので、みんな村に戻り始めた。自分は2005年、村に戻った。補償金や見舞金は一切、もらえなかった¹⁴。

2012年のインタビュー当時で33歳だったこの男性は、17歳で攻撃にあったから26歳まで9年間の間、避難生活を送っていたことになる。1993年のムスリムへの襲撃はコクラジャル県の東端とボンガイガオン県の境で起き、さらに東へ広がっていった。一方、1996年の攻撃はコクラジャル県の西側ではじまり、コクラジャル県全体と周囲の県へ広がっていった。1993年の事件と同様、被害はブータンとの国境に近い県北部の森林地帯でより深刻となった。

4-2. 避難の長期化と帰還の困難さ

アディヴァシの人々の間でも、避難の長期化が問題となっている。2011年の調査時に、ムスリムのベンクトル・キャンプの付近に、避難民のアディヴァシの人々が土地を購入し、新たに村を建設していた。シラン保留林のアムテカ地域の南側、アイ・ノディ・デブプリ村など全部で7つの村から、約100家族が避難した。2011年当時は156家族に増えたという。以下、元村の小学校の先生の証言から引用する。

1996年11月19日、夜10時に攻撃が始まった。12人の武装した男が来て、脅した。立ち退かなければ殺すと言われた。軍や警察も攻撃に加わっていた。1997年5月18日、一部の人が村に戻った。1998年の4月、また攻撃があつて立ち退いた。2回とも、ベンクトルの動物病院の敷地に来た。1998年に調査があつて、その時に名前があった人たちのみ、補償金が支払われた¹⁵。

この村では、自分たちの土地の現状について、誰が占拠しているのかははっきり把握しているものの、取り戻せない状況が印象的だった。

元の村はアイ川の反対側にあった。永年地権のある土地で、ここには7つの村から来ている人が集まっている。今はボドの人々が奪ってしまった。でも、センサスの調査は自分がやったので、誰がどこにいるかは今でも知っている。税金も自分で支払っている。自分は72ビガの土地を持っていた。自分の土地を占拠しているボドの人々と会ってお茶を飲むこともある。でも、土地の話をするのではない。村の人々の一部は帰って自分の土地を耕している人もいるが、みな危険にさらされている¹⁶。

どうしてアディヴァシの人々が攻撃の対象になるのかという話になった際には、このような解釈を述べた。

この地域では、1986年ころからアッサム人が立ち退きを要求され始めた。殺害も起きた。1993年がムスリム、そして1996年がアディヴァシの村だ。ここはトライブ保護地帯で、自分たちはトライブではないのでどうすることもできない¹⁷。

1986年はABSUによるボドランド要求が始まった年であり、この時期からボド以外の人々が立ち退きを要求されたという証言は興味深い。ま

¹⁴ コクラジャル県カリガオンにおける学校教員とのインタビュー（2012年3月4日）。

¹⁵ コクラジャル県旧ベンクトル難民キャンプにおける元小学校教員とのインタビュー（2011年3月6日）。

¹⁶ 同上。

¹⁷ 同上。

た、「ここはトライブ保護地帯で、自分たちは指定トライブではないのでどうすることもできない」という発言も注目に値する。実はトライブ保護地帯・地区は法制化の段階で指定トライブだけではなく後進諸階級全体を対象に含めており、サンタル・オラオン・ムンダなどのアディヴァシの人々も保護対象に入る。しかし、アッサム州で指定トライブのリストに入っていないアディヴァシの人々が通称「トライブ保護地帯・地区」の対象となっている認識が薄く、そのためアディヴァシの人々の利益を守るための「トライブ保護地帯・地区」を根拠にして出て行けと言われるという矛盾が存在する。

今でも自分の土地を夢に見ることがある。土地をなくして、とても悲しい。自分も父も（攻撃で奪われた）その村で生まれた。われわれはジャールカンド州から来たのだから、ジャールカンドに帰れ、と言われる。しかし、ジャールカンドのことは聞いたことはあるが、行ったことも見たこともない。土地もないのに、どうしろというのか¹⁸。

移住して三世代目となるアディヴァシの人々はアッサム語を話し、土地の文化にも良くなじみ、ボドやラバなどのトライブの人々と平和的に共存していると思われてきた。しかし、植民地化以降にアッサム州に移住してきたということで、ボドランド要求の高まりの中で「よそ者」とみなされ、地権を持っているにも関わらず、アッサムでの居住の正当性を疑問視されているさまが読み取れる。

4-3. 森林地への帰還と森林局による追い出し

一方、国有林におけるいわゆる「不法占拠者」だったものの中にも、森林地の元の村があったところに帰って村を再建した人々もいる。ただし、こうした人々の中には今度は環境森林局による追い出し (eviction) の被害に遭う人々も少なくない。

アムテカ地域の第二アイ・ボワリ村出身だという男性は、自分は森林地に住んでいたのが不法占拠者だと自ら名乗った。1996年の事件の被害に

あって、ひと月ほどキャンプに滞在した。また、98年から3年間、デオシリというブータンとの国境付近の森林村に作られた避難キャンプに滞在していた。しかし、行くところがないので、2003年には元の森林地の村に戻ったという。帰還してから状況をこう語った。

今自分が住んでいるのは、攻撃の前にいたところだ。8年前に戻ってきた。森林地（保留林）なので、ときどき（環境森林局による）追い出しがある。2年前には36の家が焼かれた。8年前までは怖くて元の村に戻ってこられなかった。今も恐怖はあるが、他に行くところもないのではないでしょうか。子どもたちもここで学校に行っている。

自分はシドリ（シラン県にある町の名前）の出身だ。3歳のとき、両親に連れられてアムテカにきた。シドリでは土地がなかったから。（アムテカ地域全体で）54,000 ビガが当時、明け渡された¹⁹。

2011年時点で40才だという男性が3歳のときにアムテカに移住したということは、37年前、1974年に移住したということとなり、先述の「1970-72年に明け渡された」という話とほぼ一致する。アディヴァシの他にボド、ムスリム、ネパール人などがいたが、ボド以外は追い出されてしまった。お金を払うことのできたネパール人の一部はいまだにとどまっている、ということだ。

85の家族が村に戻った。政府が何も面倒を見てくれないからだ。恐怖はあるが、どこにも行くところがない。今では子どもたちも育って、助けてくれる。8ビガの土地を耕している。土地の一部は河岸浸食でなくなってしまった²⁰。

環境森林局による追い出しは上記の例のように数年に一度、村の一部の家が焼かれるという事例がほとんどであるが、2010年に大規模な作戦があり、暴力や略奪も行われたということで問題になった事例を見てみたい。この事例は、コクラジ

¹⁸ 同上。

¹⁹ コクラジャル県デオシリ森林村における元避難男性とのインタビュー（2011年3月7日）。

²⁰ 同上。

ャル県の北部のルンシュンと呼ばれる保留林の中で起き、アディヴァシに対してのみ暴力が振るわれたということも問題となった。

村を代表して一人の男性が回答してくれた。彼によれば、1965年にコクラジャル県の別の土地からここに移住したという。1974年に追い出しがあったが、1970年代後半には追い出しは止んだという。1996年と1998年の事件の際にはそれぞれ襲撃にあって、村人たちはキャンプに避難していた。

2006-7年にも追い出しはあったが、一つか二つの村が焼かれたただけだった。家を壊すが、食糧や作物は荒らさない。少し前にやってきて、「ここにいてはいけない」と言われるが、それも強くではない。しかし、2010年は大規模だった。事前の警告はあったが、さほど強くなかった。10月30日と31日、朝8時に始まった。ボドランド森林保護隊(Bodoland Forest Protection Force)というNGOと森林警備隊(Forest Guard)、エコ・タスク・フォース(Eco Task Force)、それに労働者たちもいた。日雇いのボドの労働者たちだ。コクラジャルから連れてきたのだと思う。日当として500ルピー支払われたと聞く²¹。

ルンシュン地域における追い出しでは、通常は家を焼いて人々を追いつくとするだけであるのに対し、略奪や暴力があり、けが人が出たことが特徴である。森林警備隊は環境森林局管轄下で森林の警備にあたる人員を指し、州政府の役人だが、それに加えてボドランド森林保護隊という名目で若者が組織されており、日雇い労働者とともに以下のような略奪と暴力をふるった。

攻撃者たちは13台のトラックに積み込まれて、森林局の役人と一緒にやってきた。最初に家に火をつけて、それから略奪を始めた。鳥や家畜を持っていかれて、食糧や台所用品まで焼かれたり壊されたりした。庭のビンロウジュの木やバナナの木までもだ。森林

警備隊やボドランド森林保護隊が棍棒(lathi)で人々を攻撃して、42人逮捕していった。二か月ほどつかまっていたと思う。日雇い労働者たちは耕作地を焼いたり、家畜の略奪に加わっていた。2歳の男の子が家ごと焼かれた。また、女性が手を怪我した。でもほかに行くところがなかったので、みんなここに戻ってきて、そのまま生活している²²。

この事件は被害者のほとんどがアディヴァシであり、近隣のボドの人々はほとんど攻撃されなかったため、BTC政府による差別的な対応ではないかということが問題となった。一方、環境森林局の担当官僚は筆者のインタビューに対し、「この地域は新たに不法占拠された土地であり、水資源や環境保護の観点から重要なためターゲットとなった。アディヴァシの地域のみには追い出しを行ったわけではない」とこたえた²³。しかし、地域の人々はそう捉えていない。また、ボドランド森林保護隊についても、BTCは「若者によるNGOだ」というが、人々の認識では「棍棒で武装したボドの若者たちの部隊」であり、「お酒を飲んで家を破壊したり、鳥を持って行ったりしてしまう」として恐れられている。

この追いだしの後にはアディヴァシの学生団体や武装グループが抗議のデモを行ったが、行政からは何の対応もなかった。こうした状況下、アディヴァシの人々はBTCの管轄下では自分たちの身の安全が保障されていないと感じ、警察や行政は自分たちの味方ではないどころか、むしろ若者の武装集団を使って自分たちに攻撃を加えてくる勢力と認識されている。

5. おわりに

ボドランドにおける紛争による国内避難民への調査から、以下のことが明らかになった。

まず、避難が長期化する理由は、暴力の存在が第一にあげられている。暴力といっても、地域においてマーケットなどで突然誘拐されたり、殺害されたりする事件から、環境森林局による追い出し事件までさまざまなレベルの暴力がある。第二

²¹ コクラジャル県シラン留保林ルンシュン地域におけるインタビュー（2012年3月4日）。

²² 同上。

²³ コクラジャル県シラン留保林担当の環境森林局役人とのインタビュー（2011年3月9日）。

次ボド協定時に国内避難民の帰還について合意されており、BTC 政府は避難民の帰還に一定の責任がある筈だが、積極的な対策はほとんど行われていない。むしろ、ルンシュン地域における NGO を称する武装した若者たちの利用のように、BTC 政府が武装した若者や旧武装勢力を利用しているということは選挙のたびに報道されている。こうした状況下では、警察や行政もアディヴァシやムスリムの被害者の訴えを中立に取り上げることがほとんどなく、人々は村へ戻ることができずに避難が長期化する。

次に、なぜ森林地が攻撃の対象となりやすいか、という点に関しては、森林地における居住の正当性の曖昧さや、アムテカ地域をめぐる長年のボドの人々の不満があげられる。生存者の証言に見られるように、アムテカ地域は当時の政権によって土地なし農民が再定住した土地であり、人々が勝手に不法占拠した土地ではない。しかし、森林指定が解除されなかったため、人々の土地権は未だに認められず、法的には不法占拠ということになる。また、森林地帯には警察のパトロールも少なく、環境森林局は人々の安全には無関心であるため、官憲の目も届きにくい。そのため、暴力の際に格好の標的となっている。

また、こうした人々の証言から、そもそも法律やさまざまな制度が避難民となるような貧しい農民の利益になるように運用されておらず、そのためにより不利益を被っている状況が明らかである。アムテカ地域の人々は当時の政権の計らいによって森林地に再定住したにも関わらず、森林指定解除がなされなかったために不法占拠者という位置づけである。ルンシュン地域の人々も、紛争後に再定住地がないため森林地帯に戻ったにも関わらず、環境森林局の追い出しにあっている。事件の性質を考えれば、再発防止のための対策や再定住地が用意されて然るべきだが、そういった配慮はほとんどなされていない。

以上のように、ボドランド地域において国内避難民となった人々は、実際の紛争が終わったあとも暴力にさらされている。ボドランド地域に特徴的なことは、政府が暴力の存在を知りつつも黙認していたり、武装グループを利用してアディヴァシやムスリムを排斥していることである。こうした状況に変化がない限り、紛争の被害にあった人々にとって、紛争は未だに終わらないままである。インド政府とアッサム州政府、そして BTC

政府が紛争の解決を望むのであれば、被害者の再定住と武装集団への対策が不可欠である。

参考文献

- Baruah, Sanjib (1999) *India against Itself: Assam and the Politics of Nationality*, New Delhi: Oxford University Press.
- Chaudhuri, Kalyan (1994) "Outrage in Assam," in *Frontline* (August 26): 28–35.
- Das, J. N. (1986) "Genesis of Tribal Belts and Blocks of Assam," in B. N. Bordoloi ed., *Alienation of Tribal Land and Indebtedness*. Guwahati: Tribal Research Institute: 28–38.
- Horowitz, Donald L. (2001) *The Deadly Ethnic Riot*, New Delhi: Oxford University Press.
- 木村真希子 (2012) 「先住民族の土地喪失と移民との紛争」『フード・セキュリティと紛争 (GLOCOL ブックレット 07)』大阪グローバルコラボレーションセンター：95–107。
- Kimura, Makiko (2013a) *The Nellie Massacre of 1983: the Agency of Rioters*, Sage: New Delhi.
- Kimura, Makiko (2013b) "Ethnic Conflict and Violence Against Internally Displaced Persons: A Case Study of the Bodoland Movement and Ethnic Clashes," in *International Journal of South Asian Studies*, 5: 113–129.
- Narzary, Charen (2011) *Dream for Udayachal and the History of the Plains Tribals Council of Assam (PTCA, 1967–1993)*, Kokrajhar: N. L. Publication:.
- Pegu, Yadav (2004) *Reclaiming Identity: A Discourse on Bodo History*, Jwngsar Narzary: Kokrajhar.
- The Deputy Commissioner, Kokrajhar (2000) *Action Plan for Rehabilitation of the Refugees of 1993, 1996 and 1998 Ethnic Violence*, Dispur: Government of Assam.